
あいさつ

ささやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいさつ

【Nコード】

N8455V

【作者名】

ささやか

【あらすじ】

もしも、みんなが仲良くあいさつができるような世界になったら、きっと今より平和になるんじゃないかな。

あいさつ共通言語の普及した世界。そんなお話。

「テルテモーネ」

いつもの時刻に出社して、私は元気良くあいさつした。

同僚は勿論のこと、上司も気持ち良くあいさつを返してくれる。こんな些細なことでも、するとしないでは社内の空気が全然違うものだ。私は実に晴れやかな気分の仕事を始めた。

今日の大きな仕事は、得意先との重要な商談だ。万が一私が失敗すれば、我が社の経営は大きく傾くと言ってもいいだろう。しかしそんな心配をする必要はない。私達にはあいさつがある。

「コザムソーレ」

白い肌をした大柄な得意先が、通訳を連れて部屋に入って来る。

私達はいつものように愛想良くあいさつした。

通訳を介して私達は会話を続ける。

「今日も良い天気だ。景気も良くなっているし、最近は本当に上手く回っているね」

「キユー。今朝のニュースを見ると、また犯罪発生率の方も減少しているらしいですよ」

「ああ、私も見たよ。全く素晴らしいことだ」

私達は顔を見合わせて微笑む。

そして終始にこやかな雰囲気にもまれたまま、商談は滞りなく終了した。

「ウルメレ。どうか気をつけてお帰り下さい」

得意先を見送った後、私はデスクに戻り、仕事を滞りなくこなした。

あいさつ共通言語なるものが全世界に普及してからかなりの年月が経った。

人は何気ない小さなあいさつでも驚くほど明るい気分になれる。あいさつはいつてみれば小さな魔法のようなものだ。

昔の人間は知り合いと顔を合わせてもろくにあいさつすらしなかったそうだが、それはもう過去の話。

今では自国の人どころか、世界中の人とあいさつが気軽にかかわせるようになったのだ。これもあいさつ共通言語が創られたおかげだ。あいさつ共通言語が普及してから国際情勢は安定し、凶悪犯罪も減り、さらにはあれだけ何をやってもダメだった景気も回復しつつある。社会を構成するのは人なのだから、人が変われば社会も変わる。

つまりこれは当然の結果だった。

夜。仕事も終わったので家に帰ることにした。電車に乗れば、そこには見なれた顔のサラリーマンばかりだ。そんな彼等にあいさつをして、私は最寄りの駅まで、雑談しながら楽しい一時を過ごした。電車を降りると、駅では行き交う人々があいさつしており、あいさつにあふれている。私は偶然にもお隣さんと遭遇した。

「アムスモーネ。これは奇遇ですね」

とあいさつをすると、彼もにこやかにあいさつを返してくれる。

「アムスモーネ。今お帰りですか？」

「キュー、そうです」

「いやあ、私もですよ。お仕事お疲れ様です」

「そちらのほうこそ大分お仕事が忙しいのでしょうか？ 以前言っていたじゃないですか」

私達は親しげに会話を続けながら歩いた。隣人を愛するのは思いのほか簡単だった。あいさつがあればいい。

「あ、ではここで。ウルメレ」

「ええ、ウルメレ」

自宅前で別れて、それぞれの玄関を開ける。

「ターダン」

お隣さんの潑刺としたあいさつを聞きながら、私も家内に向かって勢い良くあいさつをした。するとぱたぱたと足音を響かせながら家内がやってくる。

「サリーソ」

私は温かく出迎えてくれる家内にコートを預け、靴を脱いだ。

「今、何か軽くつまめるものとビールでも用意しますから、晩御飯までもう少し待っていて下さい」

家内は私のコートをかけながら言う。

私はスーツから部屋着に着替えソファに腰を下ろした。テーブルには既にビールと枝豆が置いてあった。テレビでは一日のニュースが報道されている。

こんな何気ない妻の気遣いが嬉しくて、思わず顔がほころぶ。以前私の浮気が発覚した時は、離婚を覚悟するほど冷え切った夫婦仲になっていたのに。

しかし粘り強い謝罪と日々のあいさつを繰り返すことによって、私達は元通り円満になった。あいさつがあれば人の縁は決して切れないのだ。

しばらくビールを飲みながらくつろいでいると、飼い猫が目の前を横切る。きつと枝豆が目当てなのだろう。私は枝豆を手の平に乗せゆっくりと近寄った。

「アムスモーネ。ほら、食べていいんだぞ」

だが飼い猫は、人を小馬鹿にしたようなあくびをすると、さっと走り去ってしまった。差し出した手が虚しい。

私は揺れる尻尾を目で追いながらも一度呟いた。

「……アムスモーネ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8455v/>

あいさつ

2011年10月9日15時01分発行